

## I. 導入

おはようございます。カレンと私は、アメリカにいる息子と無事会うことができました。また、先週は静岡県で行われた ANRC 帰国者カンファレンスに参加し、祝福されました。しかし、皆さんのいる大阪に帰ることができて、ほっとしています。主が皆さんを守ってくださったことと存じます。

今日は、忠実さについてお話したいと思います。特に、主が与えてくださった召しを忠実にまっとうすることについてです。コリント第一 4:2 にはこうあります。「この場合、管理者に要求されるのは忠実であることです。」パウロは、コリントにある教会に向けてこの言葉をつづっていますが、同じことが私たちにも当てはまります。私たちはそれぞれ主から委ねられたものがあります。そして、その委ねられたものに対する責任を忠実に果たすことは、りっぱで正しいことです。では、委ねられたものとは何でしょう。いろいろなことが考えられますが、ここでは、管理責任と言えましょう。管理する内容は、神が私たち一人ひとりに与えてくださった時間、物や経済力、スキル、賜物などがあります。それに加え、神の御国において果たすべき目的も含まれます。この管理責任において、私たちは神の目的のために委ねられたものを用いる責任を主に対して負っています。つまり、「みこころにしたがって、神が与えてくださった時間やお金、才能を使っているか」と常々自問するよう促されています。



すべてのクリスチャンに当てはまる召しもあります。例えば、神はご自身の民に、愛のある、あわれみ深い、親切、寛容、平和、忠実な、清い聖なる者であることを望まれます。カレンと私が参加した ANRC カンファレンスでは、そのうちのひとつに焦点を当て、「あわれみの器として召しに応答しよう」というテーマを掲げていました。メッセージや分かち合いの中心は、どのようにすれば私たちが人にあわれみを示すことにおいてさらに神のみこころにそった心をはぐくむことができるかについてでした。ご興味のある方は、カンファレンスの様子を <http://www.ustream.tv/channel/anrc-2012> でご覧になれます。



すべてのクリスチャンに当てはまる召しもある一方で、一個人、または特定の団体や教会に神が特定の召しを与えられる場合もあります。今日の学びでは、神がバルナバとパウロに開拓宣教の働きという特定の召しを与えられたことを見ていきます。また、使徒の学びを続けていくと、ふたりが神の召しに忠実であったことがますますわかっていきます。

主の召しに応じて、パウロとバルナバは約 2 年の宣教旅行に出かけます。この旅で、ふたりはまずキプロス島にたどり着きます。スタヴロヴーニ修道院にある絵画に見られるように、彼らは地元教会の創立者として称えられています。では、使徒 13:1-13 をお読みしましょう。



## II. 聖書朗読

13:1 アンティオキアでは、その教会にバルナバ、ニゲルと呼ばれるシメオン、キレネ人のルキオ、領主ヘロデと一緒に育ったマナエン、サウロなど、預言する者や教師たちがいた。 13:2 彼らが主を礼拝し、断食していると、聖霊が告げた。「さあ、バルナバとサウロ

をわたしのために選び出さない。わたしが前もって二人に決めておいた仕事に当たらせるために。」 13:3 そこで、彼らは断食して祈り、二人の上に手を置いて出発させた。13:4 聖霊によって送り出されたバルナバとサウロは、セレウキアに下り、そこからキプロス島に向け船出し、 13:5 サラミスに着くと、ユダヤ人の諸会堂で神の言葉を告げ知らせた。二人は、ヨハネを助手として連れていた。 13:6 島全体を巡ってパフォスまで行くと、ユダヤ人の魔術師で、バルイエスという一人の偽預言者に出会った。 13:7 この男は、地方総督セルギウス・パウルスという賢明な人物と交際していた。総督はバルナバとサウロを招いて、神の言葉を聞こうとした。 13:8 魔術師エリマ——彼の名前は魔術師という意味である——は二人に対抗して、地方総督をこの信仰から遠ざけようとした。 13:9 パウロとも呼ばれていたサウロは、聖霊に満たされ、魔術師をにらみつけて、 13:10 言った。「ああ、あらゆる偽りと欺きに満ちた者、悪魔の子、すべての正義の敵、お前は主のまっすぐな道をどうしてもゆがめようとするのか。 13:11 今こそ、主の御手はお前の上を下る。お前は目が見えなくなって、時が来るまで日の光を見ないだろう。」するとたちまち、魔術師は目がかすんできて、すっかり見えなくなり、歩き回りながら、だれか手を引いてくれる人を探した。 13:12 総督はこの出来事を見て、主の教えに非常に驚き、信仰に入った。 13:13 パウロとその一行は、パフォスから船出してパンフィリア州のペルゲに来たが、ヨハネは一行と別れてエルサレムに帰ってしまった。

### III. 教え

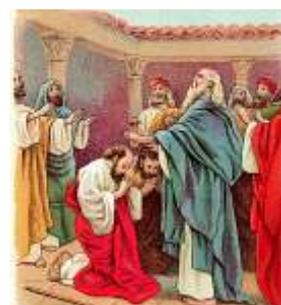
エルサレムで迫害が始まると、アンティオキアにイエスの信徒がたくさん集まりました。イスラエルとローマ帝国統治下では、迫害があちこちで起こるとい状態が長年続きました。また、教会伝承によると、アンティオキアの教会は迫害を逃れるため、この洞窟（写真参照）で秘密裏に集っていたといわれます。後に、この場所は聖ペテロの洞窟教会として知られるようになり、今でも礼拝が行われています。さて、使徒 13 章の冒頭で、5 人の男性が登場します。バルナバ、シメオン、ルキオ、マナエン、そしてサウルです。彼らは主に祈り、断食していました。この時、彼らはこの洞窟で集まっていた可能性が高いと思われます。



**使徒 13:2** で、聖霊が彼らの祈りに応えています。「彼らが主を礼拝し、断食していると、聖霊が告げた。『さあ、バルナバとサウロをわたしのために選び出さない。わたしが前もって二人に決めておいた仕事に当たらせるために。』」聖霊をスター・ウォーズの「フォース」のような観念的な力だと誤解する人がいますが、ここで見られるように、聖霊にはご人格があります。聖霊は、彼らの祈りを聞き、語りかけ、行くべき道を導きました。父、御子、聖霊は、すべて同じ神であり、それぞれにご人格があります。それぞれが聞き、語り、決断し、行動し、感情を持ちます。しかし、本質的にひとつであり、完全な一致があるため、神は唯一なのです。これは三位一体の神の奥義です。この奥義は聖書に示され、初代教会の時代から、真のキリスト教会ではきちんと教えられています。

ここで聖霊は、神に召された働きのためにバルナバとサウロを選び出すよう命じます。この召しの大きな内容は、**使徒 9:15** に示されています。「すると、主は言われた。『行け。あの者は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器である。』」ここで主は、サウロがクリスチャンを迫害する者からローマ帝国統治下にイエスの名を告げ知らせる大胆な説教者と変えられることを示しておられます。

アナニアは、サウロの特別な召しについて他の弟子たちに間違いなく伝えましたが、まだ時が来ていませんでした。しかし、使徒 13 章の当時、やっとその時がやってきました。バルナバとパウロはともに送り出されたの

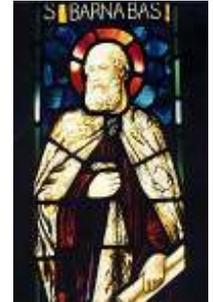


です。使徒 13:3 「そこで、彼らは断食して祈り、二人の上に手を置いて出発させた。」

手を置いて祈った後、彼らは送り出されました。どこに向かってでしょう。使徒 13:4 にはこうあります。「聖霊によって送り出されたバルナバとサウロは、セレウキアに下り、そこからキプロス島に向け船出し、」ふたりは、キプロス島に送り出されました。これは非常に興味深いと思います。というのも、キプロスはバルナバの出身地だからです。後にパウロがより目立つ存在となりましたが、この時点ではバルナバがリーダーでした。そして、神は聖霊をとおして、バルナバを故郷に送ったのです。



使徒 4:36 を見てみましょう。「たとえば、レビ族の人で、使徒たちからバルナバ——「慰めの子」という意味——と呼ばれていた、キプロス島生まれのヨセフも、」とあります。キプロスを離れたとき、彼はレビ族のヨセフでした。レビ族は、ユダヤ人で祭司職につく一族です。彼は、おそらく過越しのためにエルサレムに向かっていたのでしょう。しかし今は、「慰めの子」バルナバ、忠実なイエスの信徒として故郷の島に帰ります。聖書には、バルナバが実家に帰ったという記載はありません。両親は引越してそこにいなかったのかもしれませんが。ともかく、故郷に帰ってイエスの福音を伝えるというのは、大きな一歩です。



故郷で福音を分かち合うのは、私たちが最も重要視すべきことのひとつです。それは、私たちが家族や友人を大切に思うからこそ、イエスの愛を知ってほしいと願うからです。働きに召される人の多くは、まず故郷での働きに召されます。家族や友人、幼いころからの知り合いに福音を分かち合うことです。家庭内や地元でイエスを伝える人の証は、特に力強いものがあります。というのも、家族や幼なじみに見せかけは通用しないからです。イエスと出会ったことで私たちが本当に変えられたかどうか、家族や幼なじみにはすぐにわかります。クリスチャンになる前の私たちがよく知っているからです。そういうわけで、故郷で福音を伝えることに不安はつきものですが、その分、証に説得力があるのも事実です。



皆さんは、イエスの良き知らせを家族や友人に伝えましたか。まだそうしていないなら、ぜひ勇気を出して、その信仰の一步を踏み出してください。主がよいチャンスと適切な言葉を与えてくださり、親しい人たちにイエスのことを伝えられるように祈りましょう。そして、扉が開かれたなら、大胆に一步踏み出してください。勇気があるでしょうが、主を信じれば、主があなたもあなたの大切な人たちも祝福してくださるでしょう。

アンティオキアから、バルナバとサウロはオロンテス川を下ってセレウキアに行きました。そこでふたりはキプロス行の船に乗りました。そして、島の東岸サラミスの町に到着すると、ユダヤ人の諸会堂でイエスの良き知らせを伝えました。そこから島を横断し、パフォスにたどり着きました。キプロスは四国の半分くらいの面積ですから、おそらく数日で横断できたでしょう。



使徒 13:6-8 「13:6 島全体を巡ってパフォスまで行くと、ユダヤ人の魔術師で、バルイエスという一人の偽預言者に出会った。13:7 この男は、地方総督セルギウス・パウルスという賢明な人物と交際していた。総督はバルナバとサウロを招いて、神の言葉を聞こうとした。13:8 魔術師エリマ——彼の名前は魔術師という意味である——は二人に対抗して、地方総督をこの信仰から遠ざけようとした。」

セルギウス・パウルスは、この島を支配するローマ帝国の総督でした。バルナバとサウルが精力的に教えているという噂が彼の耳に届き、そ



れを実際に聞いてみたいと思ったのでしょう。これは、福音が島全体に広まるよい機会でした。ですから、対抗者が起こったのは驚くべきことではありません。反対者の名は魔術師エリマでした。彼は、バルイエスとも呼ばれていました。バルイエスは、「イエスの息子」という意味です。当時イエスという名はよくある名まえでしたから、バルイエスは、私たちの知るイエスとは無関係です。この魔術師は、イエスを信じる信仰に反対し、総督がイエスの福音を聞いて理解するのを邪魔しようとしていました。

**使徒 13:9-10** 「3:9 パウロとも呼ばれていたサウロは、聖霊に満たされ、魔術師をにらみつけて、 13:10 言った。「ああ、あらゆる偽りと欺きに満ちた者、悪魔の子、すべての正義の敵、お前は主のまっすぐな道をどうしてもゆがめようとするのか。」

抵抗や反対に忍耐強く耐えるべき時があれば、人がイエスの福音を聞くのを邪魔する者に対してははっきり物を言うべき時もあります。黙るべき時と語るべき時とを見分けるには、聖霊の導きが必要です。ここでパウロは、聖霊に満たされ、聖霊に導かれてこの魔術師を厳しく諫めます。

**使徒 13:11** 「今こそ、主の御手はお前の上を下る。お前は目が見えなくなって、時が来るまで日の光を見ないだろう。」するとたちまち、魔術師は目がかすんできて、すっかり見えなくなり、歩き回りながら、だれか手を引いてくれる人を探した。」



目が見えなくなるのは、一時のことでした。しかし、魔術師を黙らせるには有効な方法でした。また、魔術師はこの経験によって、悔い改めて、イエスを信じる信仰にたどり着き、救われたかもしれないとも想像できます。神の御力がこのような形で現されたことで、この現場を見た人に大きな影響があったかどうかはわかりません。

**使徒 13:12** 「総督はこの出来事を見て、主の教えに非常に驚き、信仰に入った。」キプロス島の支配者、ローマ帝国の総督セルギウス・パウルスは、イエスについてのサウロの証を聞き、神の御力を見て、信じました。彼の名は「パウルス」です。パウルスは、パウロという名の違った呼び方です。使徒言行録では、この一件の後、サウロはパウロと呼ばれるようになりました。呼び名が変わったことについての詳細は説明されていません。総督がサウロにパウロという名を与えたという説もありますが、サウロが両方の名を以前から使っていた可能性もあります。ユダヤ人にはサウロ、ギリシャ語を話す異邦人にはパウロと名乗っていたということです。しかし、ここでサウロは異邦人への働きを本格的に始めたので、この時からパウロと呼ばれたのでしょうか。名が変わったことは、異邦人への働きに対するパウロの献身を反映すると同時に、総督の改宗を人々に思い起こさせるという役割も果たしたでしょう。

総督の改宗をはじめとするバルナバとパウロのキプロス島での働きは、島民に大きな影響を与えました。今日でも、キプロス島の約8割がクリスチャンであり、島には美しく立派な教会が点在します。この写真は、パフォスにあるセント・ジョージ礼拝堂です。ここは、人気の結婚式スポットです。



#### IV. 結び

すべてのクリスチャンは、信仰と奉仕の人生、信徒同士の交わり、イエスの福音伝道、そして御霊の実を育む生き方へと召されています。また、生活や仕事の場で光を輝かせ、日々なすべきことをするようにも召されています。それは、すべての人がキリストの名をあがめるためです。



中には、特定の働きに召された人もいます。使徒 13:2 にはこうあります。「彼らが主を礼拝し、断食していると、聖霊が告げた。『さあ、バルナバとサウロをわたしのために選び出しなさい。わたしが前もって二人に決めておいた仕事に当たらせるために。』」このような特定の召しは、今もあります。私たち夫婦のような宣教師は、聖霊による明確な召しをいただいています。さらに、私は OIC をとおして、牧師として按手を受けるようにも召されました。

今日のメッセージを終える前に、皆さんにお勧めしたいことがあります。どうか、主の前に自身の歩みを吟味してください。一人ひとり、自分に問いかけてみてください。「主が私の人生に与えられた召しを、私は忠実に遂行しているだろうか。主が新しい働きに召してくださるのに備えて、いつでも主の御声が聞けるよう耳を澄ませ、心の準備をしているだろうか。」



私たちの救いは、恵みによって与えられ、信仰によって受け取った主からの賜物です。働きによって救われるのではありません。主が与えてくださった召しに忠実に応答して働いていたとしても、その働きで救われるのではありません。しかし、主に仕え、すべてにおいて主に従うのはりっぱな正しいことです。多くのクリスチャンが、神の召しに完全に応答するまでは、心に本当の平安を得ることはできないという結論にたどり着いています。主が召してくださった働きに忠実に仕えることは、神の御国にとって非常に大切なことです。また、私たちがクリスチャンとして喜びを感じるためにも重要です。祈り、信頼できる兄弟姉妹に相談し、あなたの人生に対する神の召しに耳を澄ませてください。そして、聖霊の導きに応答しましょう。では、祈りましょう。



## V. 祈り